

新病院長に安達伸生教授が就任



「患者さんの包括的な
健康と幸福を目指す」



新病院長就任のご挨拶

病院長 安達 伸生



2024年4月1日付で広島大学病院長に就任しましたので、ご挨拶申し上げます。

私たち広島大学病院は、国民の健康と福祉の向上のために、「全人的医療の実践」「優れた医療人の育成」「新しい医療の探求」の基本理念を掲げ、地域の皆様に高度で安全な医療を提供しています。

高度で安全な医療を提供

広島大学病院は医科と歯科が統合された国内でも数少ない医科歯科連携病院であり、全人的医療を目指して、心身の病気の治療のみならず社会活動を含んだ患者さんの包括的な健康と幸福を目指した治療を行っています。近年、医療は目覚ましい発展を遂げ、ダヴィンチやhinotoriなど最新機器によるロボット手術、細胞や成長因子、新しい医療機器を用いた再生医療、がんゲノム医療、AIを利用した早期診断など高度で複雑な治療が行われています。これらの新しい医療技術を安全に患者さんに届ける必要があります。広島大学病院は特定機能病院として、がん診療連携拠点病院、小児がん拠点病院、がんゲノム医療拠点病院など多くの診療拠点として、高度で安全な医療を提供する体制を構築しています。その他、大学病院には未来の医療を託す優れた人材の育成という大切な役割があります。広島大学病院が立地する広島大学霞キャンパスには、医学部医学科・保健学科、歯学部、薬学部、大学院医系科学研究科、原爆放射線医科学研究所もあり、医療系キャンパスとしての総合力を基盤として、全人的医療、医療安全の知識を身につけた多職種にわたる医療人の育成にも力を入れています。

大学病院とスポーツ

私自身は整形外科医であり、多くのスポーツ選手の治療を行ってきました。広島市は全国的には中規模の都市ですが、広島東洋カープ、サンフレッチェ広島、広島ドラゴンフライズなどのプロスポーツチームや数々の実業団チームが存在し、大変スポーツの盛んな都市です。地元チームの活躍は広島市民、県民に元気と活力を与え、地域を大いに盛り上げてくれます。広島大学病院スポーツ医科学センターでは、スポーツに関連する様々な施設・団体・地方自治体と協力することで、プロスポーツ選手のみならず、広い年代のアスリートのトータルサポートを行っています。これらの活動によりアスリートの競技力向上や外傷・障害予防に貢献することを目標としています。また、プロ野球やJリーグなどのような「見るスポーツ」とともに、今後は「するスポーツ」が重要視されると言われています。特にシニア世代の「するスポーツ」により、身体や精神の健康増進が期待でき、人生100年時代における生活習慣病や認知症の予防や改善が期待できます。私たち広島大学病院はスポーツを通じて、皆様の健康にも貢献していきます。

【プロフィール】 1962年生まれ、1988年、広島大学医学部医学科卒業。島根医科大学附属病院助手、
安達 伸生 広島大学病院講師などをへて2016年、広島大学大学院医歯薬保健学研究院教授に就任。
あだち のぶお 広島カープ・サンフレッチェ広島チームドクター、広島大学病院スポーツ医科学センター長。

能登半島地震 医師や看護師ら派遣 DMAT隊など約30人が現地入り

令和6年元日に発生した能登半島地震は、多くの犠牲と被災者を生みました。広島大学病院は、1月11日から避難所や災害対策本部の支援のため約30人を派遣しています。DMAT(災害派遣医療チーム)、JRAT(大規模災害リハビリテーション支援関連団体協議会)などさまざまな枠組みで現地入り、被災者に寄り添いました。3月7日には院内で「能登半島地震医療支援報告会」を開き、現地の状況や支援活動、課題などを報告しました。

派遣したのはDMAT3隊、JRAT2隊、JMAT(日本医師会災害医療チーム)、DICT(災害時感染制御支援チーム)、災害支援ナース、災害登録派遣薬剤師です。大学病院単独チームや広島県チームの一員として、それぞれ数日間の支援活動に取り組みました。発災から少し時間はたっており道路は一応通っていますが、亀裂があったり道路脇の民家が崩れていたり、危険な状況もあったといいます。その影響で被害が大きい能登北部へ入るには、3~4時間かかることもあったそうです。



避難所回りニーズを確認



避難所ではそれぞれの役割に応じて聞き取りなどをして、ニーズを把握して対応。重症患者の搬送を担うこともありました。1.5次避難所の開設に立ち会ったチームは、感染者や介護者など見守りが必要な被災者もあり、感染拡大防止に努めたといいます。同じく感染対策チームも、感染者との導線の分け方や隔離対策などを助言。ただ避難所や施設ごとに状況が違い、状況に応じた対応が重要だと指摘しました。

福祉施設では、人手が足りず入所者の栄養状態が悪化したり、感染が流行したりするなど厳しい状態にあったといいます。さらに物資を届けるのが難しい上に、長時間の断水で衛生状態が悪化し感染リスクも高まると指摘していました。特に看護師の不足が深刻な状態だったといいます。

患者搬送作戦や環境整備

JRATは避難者の身体能力などから福祉避難所に入るべきトリアージ方法を考案し実施、実際に数人を福祉避難所へつなぐ対応を進めました。避難所の環境などにも着目、トイレなどに転倒防止の手すりや滑り止めマットなどを設置しました。また、簡単なストレッチや集団体操なども指導し、関連死の防止に努めました。

DMATでは建物自体が崩落の危険があるため、1病院全体三十数人の患者搬送を担ったケースも。患者、家族のニーズを聞きながら搬送先を決め、自衛隊の大型ヘリコプターなども利用しながら一日で対応しました。ただ大型ヘリは暖房機器もなく重症患者の搬送は難しかったといえます。広島大学病院が被災した場合、少ない人数で入院患者の治療をどう継続するか、また搬送方法なども検討しておくことが必要との指摘もありました。



派遣隊 役場廊下で雑魚寝も



対策本部での活動は、福祉施設からの聞き取り窓口を設置し、聞き取りシートで定型化することで効率化を進めました。情報収集と適切な物資の分配や現地ニーズに合った支援計画の立案が求められるとしています。

派遣隊員の生活はさまざまで、ホテルや病院での寝泊まりもあれば、役場の廊下で雑魚寝し、シャワーもなかったチームも。食事は持って行った非常食が基本で被災地に配慮した対応となりました。

高度救命救急センターの志馬伸朗教授は「新たな経験も生かし、今後の支援につなげたい。災害はいつどこで起きるか分からない。こちらの備えも進めていく」と総括しました。

・災害関連死防止へ ----- JRAT 三上幸夫教授(リハビリテーション科)

今回、災害リハビリテーション支援のために1月24日から石川県で活動を行いました。特に輪島市の被害は甚大で、多くの被災者が避難していましたが、身体機能のトリアージは行われておらず、支援を行う避難者の選定に苦慮しました。そこで我々は簡易身体機能トリアージ法を考案して、全ての避難所で身体機能トリアージを実施。避難所では身体機能が低下した避難者を把握することも重要であり、災害関連死防止に繋がります。

・災害医療に生かす ----- DMAT 大下慎一郎准教授(救急集中治療科)

交通網の発達していない能登半島先端を中心に被災したため、能登町の避難所で被災者と一緒に寝泊まりしながら、医療支援を行いました。倒壊しかけた病院の全入院患者を自衛隊ヘリで県外へ避難させたり、介護の手が回らず死亡者が増加していた高齢者福祉施設に医療支援を行ったりしました。南海トラフ地震が起これば、広島も被災する可能性があります。今回の経験を広島が被災した際の災害医療に活かしていきたいと思います。

・つながりを大切に ----- 災害支援ナース 在川和看護師(ECU)

15次避難所の立ち上げに参加して、小松総合体育館で31名の被災者を受け入れました。受け入れ時は元の生活に戻ることを意識して、健康確認や内服指導、健康相談などを行いました。被災者の皆さんは普段は気にならないような健康面のことで不安を感じておられましたが、医療者の介入や避難者同士の関わりによって、「独りじゃないから頑張れる」と言われていたのが印象的でした。人と人のつながりの大切さを感じました。

看護師 プラス

看護師の業務が拡大しています。「専門看護師」「認定看護師」は高度化・専門化が進む医療現場でレベルの高い看護を実践できる看護師に認められた資格です。いずれも日本看護協会が認定しています。

専門看護師は、看護師として5年以上の実践経験を持ち、看護系大学院で修士課程を修了して必要な単位を取得したのちに、専門看護師認定審査に合格することで取得できる資格で、13分野。認定看護師は、看護師として5年以上の実践経験を持ち、日本看護協会が定める600時間以上の認定看護師教育を修め、認定看護師認定審査に合格することで取得できる資格で、21分野です。それぞれの資格を持った看護師がどんな活動をしているのか、紹介していきます。



[専門看護師]

がん看護

石原 美紗子

01 どんな仕事？

がん患者さんやご家族の治療や療養、QOL向上のために、意思決定支援や看護ケアを実践しています。患者さんが納得した上で治療の選択ができ、治療や症状に関する悩みや問題に対し、治療だけでなく生活や症状緩和に目を向けられるようスタッフと共に考え協力しながら活動しています。現在は、遺伝子診療科で、遺伝子の特徴に基づくがんゲノム医療のための、遺伝子パネル検査や遺伝性腫瘍の説明同席やカウンセリングを行っています。がんの病状理解や治療への思い、遺伝に関し、家族関係などを確認した上で、わかりにくい言葉をわかりやすく情報提供し、理解の促進に繋がるように取り組んでいます。



02 きっかけは？

看取りの多い病棟経験と消化器がん患者さんの症状緩和や化学療法の有害事象に難渋し、症状マネジメントの力不足を感じ、専門的な知識や技術に基づく看護ケアを実践する必要性を感じ大学院に進学しました。

03 将来へ向けて

がん治療が複雑化し、治療の選択肢が増え、がん医療に求められるニーズや価値観が多様化する中で、倫理的課題やゲノム医療など職種連携での対応が重要になります。がん看護の質の向上に貢献できるよう、実践力や教育活動を通して協働できる仲間を増やしていきたいと考えています。



[認定看護師]

感染管理

森 美菜子

01 どんな仕事？

医療関連感染の発生を予防し、患者さんへ安心・安全な医療を提供できること、そして職員が安心して業務ができることを目指して、感染制御部で専任感染対策担当者として活動しています。具体的には、院内での感染症の発生状況をモニタリングし、日々の処置やケアの見直しにつなげるとともに、感染症発生時には拡大しないよう速やかに対応しています。その他にも、院内巡視や職員教育等による感染対策の普及活動を通して、職員の感染対策への意識や技術の向上に努めています。



02 きっかけは？

病棟の看護師として勤務していた頃、術後に感染症を起こした患者さんの看護を経験したことで、医療従事者として感染対策のレベルを上げる必要性を強く感じました。当時は、アルコールでの手指消毒が第一選択であるという考え方が出てきたばかりの頃でしたので、全国的にも感染対策の意識は十分とは言えませんでした。そこで、感染対策に関する専門的な知識を身に付け看護に生かしたいと感じ、資格を取得しました。

03 将来へ向けて

私が認定を取得して13年が経ちましたが、この間に広島大学病院の感染対策のレベルは明らかに向上しています。一方で、感染対策の専門家がいない地域の中小規模の病院や高齢者施設等では課題も多くあります。これからは、他病院や施設の感染対策を支援させていただくことで、広島県内の感染対策の底上げを図り、県民が安心して医療や福祉を受けていただけるようにすることが目標です。



診療科最前線

「呼吸器内科」

(診療科長:服部登教授)



「免疫チェックポイント阻害薬」や腫瘍の遺伝子異常を標的とした「分子標的薬」が治療の主役となり、当科でも多くの患者さんにこれらの薬剤を用いて治療を行っています。

喘息:ステロイドの吸入を含む既存の薬剤では十分症状を制御できない重症喘息患者さんに対して、近年立て続けに使用可能となった抗体製剤を積極的に導入し、症状の改善に繋げています。

▶ 診療科の特徴

呼吸器内科では、特発性肺線維症・膠原病肺などの間質性肺炎、肺癌、気管支喘息、COPD(慢性閉塞性肺疾患)、睡眠時無呼吸症候群、肺炎などの呼吸器感染症、急性及び慢性呼吸不全など呼吸器に関連するすべての疾患に対応できる診療を行っています。

▶ 患者さんの動向

外来では、毎月平均750人程度の患者さんの診療を行っており、そのうち60～80人が初診の方です。初診の患者さんは間質性肺炎、肺癌、重症気管支喘息など多岐にわたり、大学病院として専門性を活かした最先端の治療を実施しています。

▶ 得意分野

間質性肺炎:間質性肺炎は大きく2つに分けることができ、原因がはっきりしない「特発性」とアレルゲンの吸入や他の全身疾患に伴って発症する「2次性」があります。治療法の選択にはこれらの鑑別が重要ですが、当科では内視鏡を用いた肺内の炎症細胞の分析や組織生検だけでなく外科的肺生検等も活用し、早期かつ適切な治療導入を行っています。

肺癌:当科で診療に当たるのは主に薬物療法の適応になる患者さんです。近年の癌治療の進歩は目覚ましく、患者さん自身の免疫を活性化することで抗腫瘍効果を発揮する

▶ かかりつけ医との連携

ご紹介いただいた患者さんの診断・治療方針が決まり、状態が安定された場合には、紹介元での診療に戻っていただけるように連携を心がけています。

▶ 新しい動き

間質性肺炎の原因精査・治療法の選択のために従来実施していた内視鏡による組織生検は、採取可能な組織量が少ないことが問題でした。しかし、当院では近年普及したクライオバイオプシー(肺組織の一部を凍結させて採取する方法)を用いて大きな組織を採取することで、より正確な診断・適切な治療の選択に結びつけています。また肺癌に対する免疫チェックポイント阻害薬の耐性を克服するため、免疫チェックポイント阻害薬にPAI-1阻害薬を併用する医師主導治験も実施しており、新たな治療法の開発にも挑んでいます。



催しのご案内

(2024年5月～9月)

肝臓病教室

「B型肝炎～知って、守って、健やかに～」

講師：消化器内科 医師 藤野初江

「助成制度について」

講師：患者支援センター

医療ソーシャルワーカー 采岡水鶴

5月20日(月) 15:00～16:00

会場：臨床管理棟3階1・2会議室

申込：不要(参加費無料)

問い合わせ：肝疾患相談室

☎082-257-1541

(10:00～12:00 13:00～16:00)



がん治療を支える**患者サロン** 会場：いずれも臨床管理棟3階 3F2会議室/Zoom

抗がん剤の副作用とうまくつきあうために

5月23日(木) 13:30～14:30 講師：がん化学療法看護認定看護師 清本美由紀

がんとりハビリテーション

6月19日(水) 13:30～14:30 講師：理学療法士 筆保健一

乳がんの基本について

7月18日(木) 13:30～14:30 講師：乳腺外科医師 池尻はるか

患者おしゃべり会 会場：いずれも診療棟2階 健康情報プラザ

5月28日(火) 7月23日(火) 9月24日(火) 13:30～14:30

申し込み・問い合わせ：がん相談支援センター ☎082-257-1525